

氏名	梁 帥
学位の種類	博士 (医学)
学位記番号	甲第465号
学位授与年月日	平成28年3月25日
審査委員	主査 教授 織田 禎二
	副査 教授 丸山理留敬
	副査 教授 小林 裕太

### 論文審査の結果の要旨

大動脈弁狭窄症は弁膜症の中で最も頻度の高い疾患であり、高齢化に伴い急速に増加している。重症化により狭心痛、失神、心不全症状が出現すれば予後不良のため外科的手術が勧められるが、高齢者に対する手術タイミングの決定は、加齢に伴う手術リスクの増加から判断が難しくなる。本研究では80歳以上の大動脈弁狭窄症患者の自然歴に影響を与える因子について検討した。対象は80歳以上で、心エコー検査にて大動脈弁口面積 $1.5\text{cm}^2$ 以下の108例である。平均年齢は $84.2 \pm 3.9$ 歳、男性43例、女性65例で、初診時の大動脈弁口面積は $0.85 \pm 0.27\text{cm}^2$ 、大動脈弁血流速度は $4.1 \pm 0.9\text{m/sec}$ であった。80例に初診時より自覚症状があり（有症状群）、狭心痛が26例、失神が7例、心不全症状が47例に認められ、28例は無症状であった（無症状群）。追跡期間は中央値で9か月（四分位値は2～25か月）であった。有症状群と無症状群で大動脈弁狭窄症の重症度に差は認めなかった。追跡期間中に38のイベント（大動脈弁置換術あるいは死亡）が発生し、26例に大動脈弁置換術が施行され、16例が死亡した。イベントフリー生存率は1年で $70 \pm 5\%$ 、2年で $62 \pm 6\%$ 、3年で $47 \pm 8\%$ 、4年で $43 \pm 8\%$ 、5年で $43 \pm 8\%$ 、6年で $29 \pm 13\%$ であった。有症状群と無症状群でイベントフリー生存率に差は認めなかった。Cox回帰分析によると、イベントフリー生存率に関与する独立因子は大動脈弁口面積係数（体表面積で補正した大動脈弁口面積）、大動脈弁血流速度であった。高齢者においては症状の有無ではなく、大動脈弁狭窄症の重症度自体が予後に関係した。これらの結果は超高齢者の大動脈弁狭窄症に対する治療法を選択する上で臨床的に重要な成果である。